子どものイメージ

十九世紀英米文学に見る子どもたち

松村昌家編

英宝社

子どものイメージ

十九世紀英米文学に見る子どもたち

松村昌家編

英宝社

子どものイメージ
——十九世紀英米文学に見る子どもたち——

1992年10月15日 印刷　　1992年10月20日 発行

編　者 © 松　村　昌　家

発行者　池　城　安　昌

発行所　株式会社　英　宝　社
東京都千代田区三崎町 1-1-8（〒101-91）
電話〔03〕(3292) 0167-9 振替東京 6-257

【海川企画整版・若戸製本】

序——子どものイメージの変遷

文学にあらわれる子どもは、十九世紀になって独特の意味を付与され、独特のイメージをもつようになった。十八世紀のデフォーやスモーレット、フィールディングらの小説においても、孤児の遍歴のパターンを通じて、ある種の子どものイメージをたどることはできる。しかし、これら十八世紀の伝統を受け継ぎながら育ったディケンズが『オリヴァー・トゥイスト』（一八三七—三九）を書いたときに、イギリスの小説における子ども像のあらわれ方には、一つの転機が画されることになる。「子ども時代についての特定の概念は、革命時代の成果としてあらわれた」という、J・S・ブラットンの指摘に示唆されるように、この間に挟まった産業革命とロマンティシズム運動が、文学世界における子どもと子ども時代の描かれ方に、大きな変革をもたらしたのである。

革命後のフランス文壇にロマン主義の闘将として画期的な足跡を残したヴィクトル・ユゴーは、「クリストファ・コロンブスは、アメリカを発見したにすぎない。私は子どもを発見したのだ」と言って、文学における子ども像喚起の役割の重要さを誇ったということであるが、彼の言う「子ど

もの発見」とは、具体的にはどういうことを指すのだろうか。

簡単に言って、それは子どもが、肉体的に未熟であるという点とは別に、大人とは別個の存在であることについての認識、ということにほかならない。一見あたりまえの考えのようではあるが、当時の諸制度のもとでは、そのようには見られていなかったというのが、実情であった。だからこそ、文学における子どもの発見——キャスリン・ティロットソンの言葉を借りて言えば、「成人向きの小説の中心人物として、子どもを登場させ」、かつそれに道徳的、あるいは理想主義的意義づけを行なうということは、偉大な革新であり得たわけである。

イギリスにおいては、十八世紀末にウイリアム・ブレイクの『無垢の歌』と『経験の歌』があらわれ、そのあとを引き継ぐ形で、ワーズワスにおける子ども時代賛美の系譜が形成されることになる。その流れが、産業革命の進展とほぼ平行していることは、やはり注目すべきことである。産業革命期のもろもろの労働の場における、あるいは家庭における犠牲者としての子どもたちによって、詩人たちは同情をかりたてられ、宗教的イメージを伴った無垢（イノセンス）を、子どもの本質として認識しようとする傾向が出てきたのである。

したがって、子ども時代の賛美と、子ども時代への憧憬は、必然的にイノセンスの永遠化の願望につながる。ワーズワスの「虹」や『序曲』第七篇にあらわれているように、成長の停止願望、死による清純な魂の不滅がうたわれるようになるのは、そのためである。ディケンズが、一八五三年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一月一日号の『ハウスホールド・ワーズ』に書いた「われらの成長の停止したところ」というエッセイは、まさしく小説家としてのディケンズが、子ども時代に関して、ワーズワスの遺産を受け継いでいることを証明しているようで、注目に値する。

ウォルター・アレンは、『イギリス小説』（一九五四）のなかで、十九世紀における鉄道の発達がピカレスク小説を殺した、と述べているが、私は以上見てきたような、イノセンス賛美に基づいた成長停止の子ども概念が、キャラクターとして登場してきたときに、イギリス小説は質的な意味において、ピカレスクの伝統と袂別するようになったのだと言いたい。救貧院生まれのオリヴァー・トゥイストの遍歴を、ピカレスク小説のパターンに当てはめることは容易であるが、オリヴァーは、断じてピカロではない。彼がロンドンにたどり着くと同時に、作者のディケンズは、見事にその成長を停止させてしまっているのである。

オリヴァー・トゥイストと、『骨董屋』におけるリトル・ネルを通じて、ディケンズはそれこそ永遠不滅の子ども像を作り出した。しかし、『ドンビー父子』を境目として、彼の子どもの描き方に、変化が見え始めるようになる。

『ドンビー父子』が完成したのは、一八四八年だが、その前年にシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』が出版されたという経緯を考慮に入れると、この時期に子どもを主人公とした小説そのものの流れに、一つの変動期が訪れたと言ってよさそうだ。ディケンズは少なくとも、リト

ル・ドリットあたりまで無垢と成長の停止のテーマにこだわり続けたが、彼の最後の少年ヒーロー、ピップが決してオリヴァーの復活なのではなくて、最初から「経験」の世界のヒーローを演じているのを、見逃すわけにはいかない。そして横のほうへ目を向けると、ピップとほぼ時を同じくして、マギー・タリヴァが生まれているのが見えるというのも、また興味深い。

このような推移が社会的・文化的現象と相俟ってあらわれてきたものであることを分かっていただくために、文学と隣り合わせのジャーナリズムの世界へも、少し目を向けておくことにしよう。

『ドンビー父子』の分冊月刊中、そして『ジェイン・エア』が刊行された一八四七年の『パンチ』誌に、一月から四月にかけて、ジョン・リーチによる十四葉の「成長期の世代（ザ・ライジング・ジェネレーション）」シリーズが連載された。ロマン主義時代の所産である子どものイメージを根底から覆すような作品である。登場するのは、すべてが「幼い子ども（ジュヴェナイル）」――だが、清純無垢とはおよそ縁のない、大人顔負けのおませぶりを発揮する子どもたちである。なかには、「若者をいつまでも家に閉じこめておこうなんて、とんでもない見当ちがいだぜ」などと言って、父親を脅かす恐るべき子ども（アンファン・テリーブル）さえ登場する。（図1）また同じ頃の『パンチ』（二月二十日）に、従来のイノセントな子ども像をパロディ化しているとしか思えないような、「イノセンス」という題のリーチの絵が掲載されている。そしてさらに、一八六五年十月二十一日号の『パンチ』に描かれた「なるほどイノセント！」（図2）ともなると、もうヘンリー・ジェイムズのメイジーが目の前に見えてくるような気がするのである。

図 1 THE RISING GENERATION.

Juvenile. "I TELL YOU WHAT IT IS, GOVERNOR, THE SOONER WE COME TO SOME UNDERSTANDING, THE BETTER. YOU CAN'T EXPECT A YOUNG FELLER TO BE ALWAYS AT HOME; AND IF YOU DON'T LIKE THE WAY I MUST HAVE CHAMBERS, AND SO MUCH A-WEEK!"

図 2 PRETTY INNOCENT !

Little Jessie. "MAMMA! WHY DO ALL THE TUNNELS SMELL SO STRONG OF BRANDY?"

[*The Lady in the middle never* was *fond of Children, and thinks she never met a Child she disliked more than this one.*

『パンチ』には、文学作品でもおなじみの道路掃除少年、煙突少年、街の浮浪児（ストリート・アラブズ）をはじめさまざまの境遇の子どもが数多く描かれているが、共通する特色の一つは、子どもは大人が考えている（あるいは望んでいる）ほどに、無害ではない、ということだ。

子どもを天使ではなく子どもとして見ること——これは、ルイス・キャロルが『シルヴィーとブルーノ』を書くに際しての目標であった。「シルヴィーもブルーノも、作品全体を通して妖精ではなく——子どもなのです。」と、キャロルは、挿絵画家のハリー・ファーニスあてに、挿絵心得について書き送っている。彼が少女を天使として賛美するセンチメンタリズムに背を向けて、「ロンドンの生活に見られる、ごく普通の服を着た子ども」を描こうとする態度を表明したものである。しかもこのルイスは、特異の「少女コレクション」趣味の持ち主でもあった。「できたら着物などなしで行きたかったのです。裸の子どもほど清らかな、かわいいものはありません。でも世間の人（ミセス・グランディ）が騒ぎ立てることでしょう——」と、先の手紙の続きで述べているのである。

考えてみると、少女の清純さの賞揚というのは、もともとアンビヴァレンスを多分に含んだものである。それは、一皮むけば少女愛好のエロティシズムにつながる可能性をはらんでいるのである。まさに、ヴィクトリア朝のジェントルマン階級の生活に伴った二重の規準（ダブル・スタンダード）を象徴するような現象だ。文学作品よりもジャーナリズムに取り上げられることの多かった売春の世界において、彼らの熱烈な「賛美」の対象となったのは、十三歳前後の少女たちであったのである。前述ルイス・キ

ヤロルの手紙が書かれるより数年前の一八八五年七月十日に発行された、ウイリアム・トマス・ステッドの「モダン・バビロン（ロンドンのこと――筆者）の少女御供」には、セクシュアリティの犠牲になった少女たちに関する実態調査の結果が、生々しく描き出されている。

このようにイギリスで子どものイノセンスがパロディ化され、そのアンビヴァレンスが極端になっていた頃に、アメリカでは『ハックルベリー・フィンの冒険』があらわれた。ハックとオリヴァーとを比較して、現実性に関する両者の差異をあげつらうのは容易であろう。しかし、以上述べてきたような、イギリス文学・ジャーナリズムを通して見られる子どものイメージの変遷の過程は、ヘンリー・ジェイムズはいうに及ばず、マーク・トウェインやホーソーン、そしてスティーヴン・クレインにおける子どものイメージとも無関係ではあるまい。周囲の文化現象との関連性を通して見ることによって、一つの作品について新たな、より立体的な発見がなされるのと同じように、イギリス、アメリカの文学における同一テーマの相関性を通観することは、それなりに意義のあることだと思うのである。当初はヴィクトリア朝文学における子どものイメージをテーマにして、単独執筆のつもりで想を練り始めたが、そのうちに、各々の作家・作品についてのより適切な執筆者を起用して、幅を広げようと思うようになったのも、そのためである。序としてしたためられた、この「子どものイメージ変遷」の概観が、本書における各論のつなぎ役、ないしは内容の理解の上での補助線的な役割を果たすことができたら幸いである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

最後に、本書の企画の段階から日の目を見るに至るまで、いろいろな面で励ましと有益な助言を与えてくださった英宝社編集部の宇治正夫氏にお礼を申し上げる。

一九九二年五月

松村昌家

目　次

序――子どものイメージの変遷……松村昌家　i

第一部　イギリス文学

ロマン派の子ども像……河村民部　3
――ブレイクとワーズワス――

ディケンズと子ども……西條隆雄　35

『リトル・ドリット』における
“a classical daughter”をめぐって……松村昌家　60

自然の申し子ジェイン・エア……朝日千尺　78

〈失楽園〉の子どもたち……久守和子 99
——ジョージ・エリオット『フロス河畔の水車場』——
不思議の国のアリス……稲木昭子 120

第二部　アメリカ文学

パールと緋文字……青山義孝 143
家出少年の遍歴……高田賢一 163
——『ハックルベリー・フィンの冒険』論——
「浮遊する」少女……別府恵子 184
——『厄介な年頃』のナンダ・ブルックナム考——
「ホワイロムヴィル」の子どもたち……常松正雄 204
——スティーヴン・クレインの場合——

第一部　イギリス文学

ロマン派の子ども像
――ブレイクとワーズワス――

河村民部

一　ロマン派の子ども像成立の条件

本書の題目である「英米文学における子どものイメージ」について述べるには、英文学米文学を問わず、まず子ども像の出発点となったロマン派の子ども像からはじめるのが妥当であろう。しかもロマン派の子ども像の中でも、ロマン派以降の小説の子ども像に結び付いてゆく、いやもう少し正確にいえば、継承されながら変形されてゆく子ども像を提供した最も重要な詩人といえば、勿論ブレイクとワーズワスである。

したがって本書が主として扱う十九世紀英米小説における子ども像への導入部として、この章ではブレイク (William Blake, 1757–1827) とワーズワス (William Wordsworth, 1770–1850) の子ども像を取り上げるが、本論に入る前に、ロマン派の子ども像成立の条件について概説しておきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com